日本行動計量学会会報
第31号
1983年8月8日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

行動計量学の行方

大島正光

別の言い方をすると「行動計量学よ何処へ行く」ということになろうか。

ヒトの行動をはかることからヒトの特性をつかみ出すことが行動計量学であるとすると、行動をしようとする意志決定があって、それによって行動がプログラムされ、そして行動が表出されるというプロセスになるのではなかろうか。もちろん意志決定にいたるまでには動機とそれを粉飾する条件因子とがあって、ある行動をしようということになるわけであるので、粉飾する条件としては情緒的なものもその中に入ってくることになるのであろう。このプロセスが方程式化されることとなると、ヒトという実態もかなりはっきりしてくることになるのではなかろうか。

行動計量学がヒトの行動をどのように計測できるのかどうかについてはあまり問題もないが、行動にいたる一連のつながりをはっきりすることが、まずは、手をつけなければならないことであるが、実はこの因果関係をはっきりと示してくれたら、それこそヒトへの理解の度は飛躍的に上昇するのではないかと考えている。

しかし、ヒトの場合には修飾の技術によって、この方程式を立てにくいのではなかろうか。時系列的なヒトの行動の流れが、ある程度振動現象のように振動数と振幅との変化していくものであることは理解することができるが、あまり複雑な方程式を打ち立ててみても、応用するのがむずかし過ぎて手に負えなくなるのではなかろうか。むしろ、手頃な方程式の方が実用に供しやすい場合が多いので、はないかと思える。これは実際にはヒトの行動のシミュレーションとかモデリングというカテゴリーに入るべきものであろうが、これが打ち立てられると、ヒトの情報処理、あるいはマン・コンピュータ・システムのインターフェースの問題ももう少し合理的な解決の方法があるのではないかと考えている。与えられた情報とヒトの思考とのスイッチングのあり方などが解決されるきっかけにもなるのではないかと考えてみると、面白い課題が頭に浮んでくるのである。

ある情報を与えたときに、それだけで間違いなく理解してしまう情報と、それだけでは間違いを犯す可能性が何パーセントかあること、そして間違う可能性の方が多い場合などがあり、その間違いを起こさせないためには、どのような情報を与えるべきかというノウ・ハウもわかってくることになるだろう。

ヒトの行動の過程がわかれば、ヒトとヒト、あるいはヒトとヒト以外のものとの関係もわかってくるであろう。そしてさらに、ヒト以外のもののあり方もわかってくるに相違ない。

このように考えてくると、行動計量学にはこれからやらなければならないさらに多くのものがあるはずである。測ればよい行動ではなく、それを拠点としてヒトを理解し、そしてヒト以外のものもわかってくるというプロセスは、これからのヒトの社会においてもその重要性が増しこそすれ減少することはないであろう。

行動計量学のこれからに思いをいたしてみると、やらなければならないし、また楽しい研究の分野があることに気づくわけである。若い人々の奮起を期待したいと思うのである。

（日本行動計量学会・理事。
財団法人・医療情報システム開発センター・理事長）

会報30号発刊記念企画
会報によせて
会報編集経験者三氏の寄せ書き

学会活動を支える柱に
柳井　晴夫（千葉大）

会報の第1ページに理事・監事の方の「巻頭言」を載せるのは、当初からの恒例であった。全く異なる分野の第一人者の方々が、それぞれの専門の立場からつづられたこの巻頭言は、他の学会機関誌などに見られないユニークさと重みにあふれている。

第2、第3ページには理事会、編集委員会、運営委員会の議事録がルーティン化されているが、このための議事録の整理は大層苦痛な仕事だった。学会発足当初は各種委員会の記録の整理・保存がルーティン化されていなかったのだが、会報発行が一つの契機となって、学会全体の事務の整理が促進されたといえよう。

私自身は高校時代に新聞部、大学時代に雑誌部に所属していたので、原稿の整理や割付けは苦痛でなく、むしろ楽しみだった。校正や印刷を急がせるために、せっかちな私は遠くの印刷所まで何度となく足を運んだが、これも懐しい思い出である。

発行当初から、会報は会員が眼を通す機会の最も多い貴重な情報源であり、その意味で、学会活動を支える大きな柱になるものである。会報の内容の一層の充実と発展を期待したい。

学会の〝潤滑油〟への期待
水野　欽司（統数研）

手もとにある創立当初の会報をみると、「日本行動計量学会の発足に当って」（1号　林知己夫理事長）、「真の学際研究をめざすために」（2号　山本俊一理事）など格調高い巻頭言が続いている。これに加えて「会員数四百名突破」などという大見出しを見ると、学会発足時の熱気がいまに伝わる。しかし、その熱っぽさも次第に薄らぎ、行動計量をめぐる新しい話題や、反省やら提案やらが、ある種のゆとりをもって語られるようになる。これだけでも、着実に成長する本学会の姿を、会報が実によく活写していることがわかり、楽しい。

いうまでもなく、本学会の表の顔は和・欧二つの学会誌であり、会報は学会運営の控え目な脇役にとどまる。が、会員にいちばん読まれているのは、実は会報ではないか、と私は思っている。これは皮肉でもなんでもなく、むしろ当然のことと考えている。なぜならば、学会活動の現状・あり方を考えるための大事な情報が、狭い紙面に盛られているからである。いわば行動計量学の〝フィロソフィー〟としての巻頭言、学会活動の紹介や記録、行事の予告、議事録や会計報告など、会員が学会の歩みをチェックし、将来を考えるために欠かせない内容ばかりなのである。だからこそ、歴代の編集担当者は苦心してきたのだが、まずは、それなりの成果をあげているように思われる。他学会の会報が固い記事で埋まっているのに比べて、一段と親しみ易いと思うのは身びいきであろうか。

ともあれ、会員諸氏の協力で、学会活動の潤滑油としての会報をこれまで以上に大切に守り育てていきたいと願う次第である。

学会活動の縮図として
岩坪　秀一（事務局担当）

学会誕生の頃は、事務局の若手が交代で会報を編集していた。学会活動を軌道に乗せるための仕事は他にも山ほどあり、会報発行をたった一人でしなければならない時期もあり、私にもその役目が廻ってきた。編集にズブの素人である我身を省みず、ガムシャラに進めたのだから、「若さ」の勢いとは全く恐しいものだと思う。

その頃の会報を今みると、割付けのひどさは目を覆うばかりで、知らず冷汗が出る。むかし新聞部でならしたという周囲の先生から、今なおやっつけられるほどである。

ところで、事務局担当の立場から会員各位にお願いがある。会報には学会の公式記録や会員向けの重要な情報が載っている。ぜひとも丁寧に読んでいただきたい。こんなお願いをわざわざするのも、会報を読んでいればわかるはずの問合せを結構受けるからである。

会報は学会活動の縮図といえよう。その意味で会報がますます充実していくことを願ってやまない。

☆今後ともよろしく（現会報係）

理事・監事の選挙実施さる

現理事・監事の任期（二年）が本年九月一日で切れるため、会則第七条の規定により次期理事（十五名）および監事（二名）の選挙が行われた。選挙権者および被選挙権者は、昭和五十八年三月三十一日現在正会員で四月三十日現在ひき続き正会員であるもの九二八名で、七月四日に投票を締切り、七月九日選挙管理委員会のもとで開票が行われた。有効投票数一九六（有効投票率二一・一%）、無効投票数三（差出人記名一、白票二）であった。開票の結果、当選者は次の通りである（アイウエオ順）。

〈理事当選者　一七名〉

鮑戸　弘（東大・文）
浅野長一郎（九大・理）
池田　央（立教大・社会）
岩坪秀一（大学入試センター）
印東太郎（カリフォルニア大）
丘本　正（阪大・基礎工）
奥野忠一（東京理大・工）
上笹　恒（筑波大・哲学思想）
木下冨雄（京大・教養）
駒澤　勉（統数研）
竹内　啓（東大・経）
林知己夫（統数研）
古川俊之（東大・医）
松原　望（筑波大・社工）
水野欽司（統数研）
柳井晴夫（千葉大・文）
脇本　和昌（岡山大・教養）

〈監事当選者　二名〉

開原成允（東大・医）
宮原守男（虎の門法律事務所）

以上

なお、理事については会則の規定に従い、今回選出された十七名の理事で構成される理事会において、専門分野のバランスを考慮しながら十三名の理事を新たに推薦し、九月一日の総会で承認を求めることになる。

会議議事録

▼運営委員会

時　昭和五十八年六月十三日
所　NHK放送世論調査所
出席者　運営委員・六名

1　講習会について

第十五回講習会は、中谷和夫氏（東京大）が企画・コーディネーターとなり、左記の予定で実施することが報告され、了承された。

期間　八月六日～八日
場所　富士教育研修所（静岡県裾野市下和田）

テーマ「多変量解析の諸問題」

この他、参加費・運営体制などについても検討し決定した。（詳細は六月末、各会員に発送した案内を参照のこと）

2　月例シンポジウムについて

第三十二回、第三十三回のシンポジウムが六月中に予定されていることの報告があった（それぞれの記録は本会報3、4ページを参照のこと）。

この後、鮑戸弘・江川清・上笹恒・高倉節子・二宮玲子の各氏が企画を検討中であるが、いずれも第十一回大会以後になる予定なので、次期運営委員会に引継ぐことになる。

3　その他、会報発行予定、運営委員会の計画について検討した。

▼月例シンポジウム記録

○第三十二回「日本の女性の生き方——世論調査データの分析から」（詳細は4ページを参照）。

○第三十三回「ファジイ集合とその応用」（司会・浅居喜代治）

昭和五十八年六月二十五日、大阪市立大。参加者二十六名。第三回行動計量関西懇話会と合同。

事務局から

◇新賛助会員の紹介

昭和五十七・五十八の両年度にかけて次の12社が新たに賛助会員として入会されました。これにより、賛助会員数は全部で40社になりました。

○㈱サーベイ・エージェンシー
○㈱市場調査所
○㈱スミス
○竹中工務店情報センター
○㈱統計資料サービス
○㈱日経リサーチ
○㈱日本科学技術研修所
○㈱マーケティングリサーチサービス
○㈱マープラン・ジャパン
○ライオン株式会社
○リサーチ・アンド・ディベロップメント
○リサーチインフォメーションセンター

（以上12社。アイウエオ順）

会員数（七月二十六日現在）

正会員　九三三名
準会員　一三一名
賛助会員　四十法人

会員の声

総合科学研究の難しさ

神宮　英夫

今までとはかなり異質な教育心理学の世界に身を置いて、早いもので3年が過ぎてしまいました。この3年間に心理学会以外の学会で、児童問題に関係する人達と一緒に仕事をしてみて、総合科学を目指す協同研究の難しさを痛感しています。

本学会も総合科学を目指す学会ですから、多分種々の問題点があるものと思います。私が一番強く感じるのは、毎回の大会発表のプログラムの編成です。心理学・医学・政治学等々の学問分野が、そのまま各セッションになっている点です。これらの学問分野から離れて、もう少し、研究方法から思い切ったセッションの構成をしていただければ、より興味ある学会になると思うのですが、いかがでしょうか。

たとえば、行動を計量化する場合の計量化の仕方（データ収集上の問題点など）、計量化されたデータの質、そしてその分析手法、あるいはモデル構成上の問題からなどによる分類です。

どういうわけか、人間相手の研究分野に身を置く研究者は、総合科学として人間を見つめることに大きな興味を抱くもののようです。

（日本行動計量学会会員・東京学芸大学教育学部・講師）

第32回月例シンポジウム記録

○「日本の女性の生き方——世論調査データの分析から」

日時　昭和五十八年六月十三日（月）午後一時～四時

場所　NHK放送博物館講堂

発表は、「女の意見の特色」林知己夫、「日米独の女性の生き方」杉山明子、「女性の意見の世代差」中村隆、「政党支持の女系継承」加留部清、指定討論者・岡本宏、司会・杉山明子で進められた。

今回は、学会の活動を広く一般に周知させることを狙って、「土曜日午後の統数研」からあえて「平日午後の愛宕山NHK」に移した。そのためか、マスコミ、世論調査、市場調査、大学など広い範囲から百名を越す参加者があり、副題の「世論調査の分析手法」をめぐって活発な討論が行われた。

小グループ研究会活動報告

社会調査技法研究会の初会合を六月十日（金）、統計数理研究所において開催しました。

参加メンバーは、統計学、社会学、社会心理学、言語学、環境科学、マーケティングなどの分野にわたって、大学・研究所のみならず一般企業からも集まりました。当日の出席者は十八名でした。

会では、研究会代表の鈴木達三氏（統数研）が本研究会の趣旨を説明したあと、出席者から各自の問題意識や会への抱負などが述べられましたが、その発言には、社会調査をとりまく現今の諸状況の劣悪化への危機感が共通して聞かれました。

今後は、月一回の頻度で会合を開いていく予定です。

（世話人　柳原良造　㈱マーケッティング・サービス）

☆「会報」第30号で発足のお知らせをした『社会調査技法研究会』の活動が開始され、その報告が寄せられました。会報では今後も、具体的な活動内容も含めてお知らせしていく予定です。

（会報係）

学会誌バックナンバー購入のご案内

ご希望の巻・号名、冊数、および送付先・氏名を明記し、代金と送料を左記あてに郵便振替でお送り下さい。

◇請求先　〒一五三
東京都目黒区駒場二—一九—一
大学入試センター研究部内
行動計量学会事務局　岩坪秀一

◇振替
番　号：東京八—一四八〇五六
加入者：日本行動計量学会

◇和文誌『行動計量学』
1巻1号　（八百円）
2巻1・2号（各七百円）
3巻1・2号（各千円）
4巻1号　（千五百円）
4巻2号、5巻1・2号
（各千七百円）
6巻1号　（千二百円）
6巻2号、7巻1・2号、
8巻1・2号、9巻1・2号
10巻1号　（各二千円）

◇欧文誌 "Behaviormetrika"
No. 1～13　（各二千円）

◇送料
一冊　二百四十円
三冊まで　三百五十円